

SDGsに学ぶ「つながり」の中心

浄土真宗本願寺派総合研究所 上級研究員

おかざき ひでまる
岡崎 秀磨

正座も読経も聴聞も苦手だった私ですが、自坊の法要やお盆参りなどでご門徒のご自宅に伺うことには楽しみもありました。

法要の日、朝早くから台所では、いつもお手伝いにきてくださっているおばちゃんたちがお齋のために料理をされていましたが、手の動きに負けないくらい口も動いていて賑やかでした。自坊では、法要の時は土間でお米を炊いていたことがありますが、いつもあるおばちゃんがお焦げと塩を私に持ってきて「おやつに食べて」と渡してくれました。「ご飯は炊飯器で作る」と思っていた私

は、釜でできるご飯や、釜でご飯を作るとおやつまでできることに驚きながら、おばちゃんたちの話を聞いていました。また、お参りに伺うと、もしかしたらご自身のお孫さんより年齢が離れた私と何を話したらいいか困ったからかもしれないが、私の祖父や祖母はどういった人だったかという話題から、町の歴史、ご自身のお仕事のこと、さらには戦争体験のことまで、いろいろなお話を聞かせていただきました。今振り返ると、いろいろな方からお話を聞くことは、私にとって社会勉強の場だったように思います。

貧困を含めたさまざまな世界的課題を取り上げたSDGsにおいては「つながり」が重視されていましたが、その「つながり」そのものが大きな力を持っていること、「子ども」にとっても大きな影響を与えていることを、湯浅誠さん（社会活動家・法政大学教授）は、次のように言われています。

友だちと遊んだり、多様な大人に関わってもらったりして、今は言葉にできなくても、新しい価値観を知ったり、それが人生の選択肢を広げていたりしているかもしれない。

しかし、現代においては「家族」「地域」といった「つながり」が希薄になり、私が経験したような場を持つことは困難になっていると言われています。日本の「子供の貧困対策に関する大綱」には「全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指し」とありますが、「夢」「希望」は他人から直接的に与えられるのではなく、

誰かと関わり、「つながり」続ける中で、一人ひとりが思い描いていくものだと思います。そのための場が、私にとってはご門徒との会話だったのです。

誰かのために何かしなければならぬ。金銭的・物質的な支援ももちろん大切です。ですが、漬け物の漬け方や魚のさばき方、〇〇家秘伝の味、といった日常のことや、趣味や仕事の話、子どもが知らない曾祖父・曾祖母の話、どんな話であっても、「子ども」の「未来・夢・希望」にまったく無関係とは言えないのではないのでしょうか。なぜなら、いろいろなものを見て、いろいろな話を聞いて、いろいろな考え方を知っていく中で「子ども」たち一人ひとりが成長することそのものが「生き方の多様性を認めあえる」（冊子「仏教婦人会綱領の願い」ことに繋がっていくと思うからです。「こんなこと」と思わずに、一人ひとりが「伝えたい」ことを伝えることから始めてみてはいかががでしょうか。

※SDGs（エスディーズ）とは…

国連で採択された「持続可能な開発目標」。詳しくは、前号（二四二）にて解説をしていただいておりますので、そちらをご覧ください。